

開会挨拶

著者	影山 太郎
図書名	世界の漢字教育：日本語漢字をまなぶ：国立国語研究所第8回NINJALフォーラム
ページ	1-3
発行年	2017-01-20
シリーズ	NINJALフォーラムシリーズ；6
URL	http://doi.org/10.15084/00000935

開会挨拶

影山 太郎 (国立国語研究所長)



本日は第八回目のNINJALフォーラムです。NINJALとは、国立国語研究所の英語名(National Institute for Japanese Language and Linguistics)に対する略称です。本当にたくさんの方にお越しいただき、ありがとうございます。五百名以上の方々から参加申し込みがございましたが、この会場のキャパシティが限られておりますので、それ以上の方は残念ながらお断りしなければならぬという、担当者もうれしい悲鳴をあげる状態でございます。本日は『世界の漢字教育』というテーマですので、こちらから拝見しましても、お客様の顔ぶれが、従来とはちよつと違つて外国の方々、大学院生の方々などバラエティがあるように思います。

国立国語研究所は昭和二十三年に創設されましたが、二〇〇九年十月一日に、全国の国公私立大学と一緒に共同研究を行う大学共同利用機関という組織に鞍替えをしました。来週の十月一日がちょうど発足五周年になります。このように皆様がたくさん来ていただいております。来週は十月一日がちょうど発足五周年になります。

また、本日のフォーラムは、これまでにない特別なことといたしまして、国際交流基金日本語国際センターと共催、そしてJSL漢字学習研究会から後援という、力強いバックアップをいただいております。ありがとうございます。

NINJALフォーラムで文字のことを取り上げるのは、二回目です。最初は二〇一一年の第四回フォーラムで、漢字には限定しませんでした。「日本語文字表記の難しさとおもしろさ」というテーマで開催しました。そのときの様子は、研究所のHPで閲覧していただけるだけでなく自由にダウンロードもできるようになっております。本日のフォーラムの様子もHPで公開したいと思います。

なお、二〇一一年の第四回フォーラムは、さらに内容を充実させ、わが研究所の高田智和、横山詔一の二名の教員の編集で、『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』として溪流社から今年の春に出版いたしました。是非ご覧ください。

さて、漢字という問題は、どのフォーラムに限らず少しはでてくるテーマです。今年春の第七回フォーラム『近代

の日本語はこうしてできた』のときにもお話ししましたように、明治時代から大正、昭和にかけて漢字が野放図に爆発的に増加しました。そのために、政治的にも社会的にも非常に混乱が起りました。戦後すぐにGHQの依頼で日本にやってきた米国外務省も、「漢字はぜんぶ捨ててしまつてローマ字にせよ」という報告までしたくらいです。

私は団塊の世代ということで、その当時の紛糾をまだ引きずっています。私の大学生のときの言語学の先生は強烈なローマ字論者で、先生の書かれた教科書は丸ごとぜんぶローマ字でしたし、私たち学生に対しても、「試験はすべてローマ字で解答すること」なんて言われました。それは言語学の授業でしたから、まだよかったです。ローマ字で書くことは、どこからどこまでが一つのつながりで、どこで切れるかという、言葉の分析としては非常に有効なので大変勉強になりました。しかし、もし日本語が日常の新聞、テレビ放送のテロップ、携帯メール、その他すべてローマ字となると、とても読みにくいことになります。

文字というのは、人間が言葉をしゃべり始めてからずっと後になって人工的につくられたものですから、言語学の学問研究としてはあまり中心には置かれていません。漢字はどんどん変わっていきますし、手書きのときはここを撥ねるのか止めるのかいろいろ悩むことがあります。そのようなことはあまり研究されません。しかし、私自身も語彙の研究をやっているのですが、漢字には意味がこもっている。同じ「なく」でも、「鳴く」は虫や鳥などが声を出して鳴くことで、口という偏で音声を表していますよね。そして、「泣く」は、シ偏ですから人間が涙を出すということを表しています。漢字は西洋のアルファベットとは違って意味を含んでいることが、だんだん言語学のほうでも認識されるようになってきました。つい最近、イギリス言語学会の *Journal of Linguistics* という言語学専門誌にも日本人が投稿しています。漢字はこれまで軽視されてきたが、本当は言語の非常に重要な基礎であるということが一流の国際誌に発表されたわけです。

専門的な研究だけでなく、日常の生活でも皆さんが銀行に口座を開設するとか、市役所、区役所にいって戸籍謄本等を請求するときなど、ちょっとしたでも漢字が間違っていたら受付けてくれないようなことがあると思います。公の機関だけでなく、私たちが普段書く文章でも漢字の「正しさ」が問題になります。特に私たちの名前については、たとえば、さいとうさんの「さい」には「斎藤」「齊藤」「齋藤」のようにたくさんの異字体があります。皆様のなかにも「さいとうさん」がおられるかもしれませんが、さいとうさんは、「私の『さい』はこれだ」と誇りをもっておられます。自身の影山の影だつて、ある程度誇りをもっています。ときどき手紙やメールでチョンチョンチョン

のない「景」を書いてくる人がいますが、ちょっとムカツときますね。そのように、漢字は、個人レベル、学問レベル、また書道など芸術のレベル、さまざまな広がりがあります。私たち日本人が普段使っている場合でも、たくさんのかい問題があるわけで、外国人の眼にはどのように映っているのでしょうか。今日はこれから、外国人が漢字をどのようにして身につけるのかという、非常に興味のあるテーマで五つの講演を用意しています。

異なる母語をもつ五人の外国人の方々には報告していただきますので、お楽しみください。今日はいつもより少し終わりが遅く、五時すぎになりますが、最後まで皆さんおとどまりくださいますようお願い申し上げます。これで開会の挨拶とさせていただきます。

